慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古代日本人の民族的觀念
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1921
Jtitle	史学 Vol.1, No.1 (1921. 10) ,p.85- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19211000-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代日本人の民族的觀念

一

エホバ言ひたまひけるは、視よ民は一にして皆一の言語を用ふ。今すでに此をなし始めたり。されば凡べて其なさんと圖ることはとどめ得られざるべし。いざわれら降り彼處にて彼等の言語をみだし、互に言語を通ずることを得ざらしめんと。エホバ遂に彼等を彼處より全地の表に散したまひければ、彼等邑を建つることをやめたり。是故に其名はバベル(混亂)とよばる。こはエホバ彼處に全地の言語をみだしたまひしによりてなり。彼處よりエホバ彼等を全地の表に散したまへり。

——創世記第十一章第六——九節

ここに日本人といふのは、日本民族の中心要素をなし、日本國家を創建し、古事記や書紀を作成したる所謂天孫民族をいひ、民族的觀念とは彼等が異民族に對する觀念をいふ。即ち單に民族的自覺乃至國民的覺醒といふがごとき狹い意義のみでなく、彼等が異民族を如何に觀察し、それに對して如何なる態度をとりしかをいふのである。

ヴントは人類生活の發展を原始時代、トーテム時代、英雄及び神々の時代、及びヒューマニティーへの時代の四階段にわけた。多くの人々は、アリストテレスの言へる『人間は社會的動物である』といふことをもつて、原始時代より集團生活を營めるものと思惟するのであるが、事實はこれに反して、原始時代においては人間は孤立生活を營むのである。その住居は洞穴であり、その結婚は實に一夫一婦制であ

る。それ故彼等は團體的行動たる種族戰爭は全く知らず、たゞ個人と個人との鬪爭に從事するのみである。その武器は專ら弓矢であつて、彼等はこれをもつて、かくれた藪蔭から敵を射殺する。即ち戰爭も秘密のうちに行はれるのであつて、野外戰のごときは不可能である。しかしその弓矢も本來は狩獵のためにつくられたのであつて、この事實のみによつても、トーマス・ホブスの言と反對に、原始生活がすべて敵對の戰爭狀態でなかつたことは明かである。むしろ反對に平和狀態であつたので、それが利害衝突から生ずる個人と個人との鬪爭によつて住々みだされたにすぎない(1)。

しかるにトーテム時代に至つて始めて集團生活を營み、その集團を率ゐる酋長が發生する。そして種族はそれ自身一單位と感じ、從つて關係ある種族は共同事業に協同してあたる故に、戰爭も個人的鬪爭より進んで種族戰爭となるのである(2)。けれどもこの時代においてはいまだ政治生活が發生しないから、民族的觀念のごときはすこぶる稀薄である。眞に民族的觀念のつよく意識されるのは、國家が建設されて政治生活の樹立される英雄及び神々の時代である。なんとなれば國家の建設は、一民族が他民族を征服してその領土を侵略し、その勞働力を沒收利用することによつて成就されるのであるから、こゝに始めて優秀民族と劣敗民族との間に融合と反撥とが行はれ、政治生活につれて文化的覺醒をきたし、それによつて始めてつよく民族的意識を刺戟するからである。而して國家の建設は、人類が野蠻未開の狀態より文明の域に發展せる事實を示すのである。從つて民族的觀念の强調されるのは、文明の發生によると言ふべきであらう。

註(1)　W. Wundt; Elements of Folk Psychology, trs. E. L. Schaub, p. 33－34

(2) 同上、一一九―一二〇頁

二

一般に古代文明人は、自己を優秀なる民族として宣揚し、異民族を蔑視する傾向がある。梵語で非アリヤン族を barbara といひ、ギリシャ、ローマで異民族を barbari といふのは、いづれも『吃者』の義であつて、これは彼等がその國語を尊んだことから起つた名稱であらうが、しかし他國民に對する蔑視の精神をも含めてゐるのは事實である(1)。また支那の漢民族の中華思想のごときも同じであり、彼等が異民族に對して八蠻、七閩、九貉、六狄、西羌の稱を與へたのは、それらの民族が實際に漢民族の文化に比して劣等であつたために、その文字の構造によつて知りうるごとく、これを禽獸視したのである。ことにイスラエル民族の選民思想のごときは、その最も著しいものであつて、彼等は神の初生子であり(2)、神は彼等を神の所有とならしめんがために、彼等を他の民族から區別した(3)。

わが僕(しもべ)イスラエルよ。わが選めるヤコブわが友アブラハムの裔よ。われ地のはてより汝をたづさへきたり、地のはしよりなんぢを召し、かくて汝にいへり。汝はわが僕、われ汝をえらみて棄てざりきと。(イザヤ書第四一章第八―九節)

といふがごとき思想はいたるところにみられるのである。かくの如く彼等は神に選ばれたる優秀民族であるとの自負心をもつてをり、また實際において宗教上最もすぐれたるものであつた。けれども一方において宗教的觀念よりきたれる極めて強烈なる道義的精神に富んでゐたから、異邦人に對して道德的惡

度を持することを忘れなかつた。

他國の人汝らの國にやどりて汝らとともに在らば、これを虐ぐるなかれ。汝等とともに居る他國の人をば汝らのうちに生れたる者のごとくし、己のごとく之を愛すべし。汝等もエジプトの國に客たりし事あり。我は汝らの神エホバなり。(レビ記第一九章第三三―三四節)

のごときは、その當時の周圍の民族において到底みることを得ない思想である。

かかる道義的態度は、他の民族においても往々にして見られる。古代ゲルマニア民族は極めて勇敢なる好戰民族であつて、絶えず戰爭をこととし、國に戰爭のないときには彼等の精神は懶惰に陷つた。狩獵では彼等の精神が充分に滿足できぬので、惰眠と貪食とに時間をつひやし、戰場において危險を冒したる勇猛の戰士も、平時においてはだらけた不精者となるほどであつた(5)。しかるに彼等が來客に對する態度はすこぶる慇懃をきはめ、家の主人はいかなる異邦人に對してもできるかぎりの饗應をなした。彼等は親しいものと、全くの異邦人との間に區別をたてなかつた(6)。かかる親密なる態度は、わがアイヌ人にもみることができる。彼等は古來諸種の異民族と相隣接したけれども、これを名づくるに皆その位置方向等をもつてし、いまだかつて諸民族を蔑視するがごとき惡語を用ひたことはない。彼等は自己と最も密接の關係ある日本民族を呼ぶに「隣人」の語をもつてした。即ちアイヌ語 Sam (傍) より出でたる Sham-oro(「内」の義)は日本國、その省略 Shamo は日本人の義である(6)。以上のごとき特殊の例證も存在するが、多くの古代文明民族においては、自身民族的優越感を有して、他民族を蔑視するのが普通である。

しからば古代日本人の異民族に對する觀念はどうであつたらうか？勿論彼等――天孫民族――は自

己を神裔であると確信し、從つて異民族に對してすこぶる强烈なる優越的感情を有してゐたのは事實である。けれども彼等に對して、古書のかたるかぎりにおいて、いちぢるしい民族的侮蔑や反感の言辭乃至態度をあまり示してゐない。試みにまづ日本神話において最も大規模の民族的接觸であり、從つてまた最も政治的意義を有する國讓り物語と神武天皇東征物語とを檢しやう。

國讓り物語の起源は、高天原における天照大御神が、『この葦原の中國は、わが子孫の治むべき國である』との獨斷的絶對至上命令によつて、從來中國を領有してゐた大國主命に對してその獻上を迫つたことに發する。しかるにその使命に遣はされた第一回の使者アメノホヒの神も、第二回の使者アメワカヒコもともに大國主命に服從してしまひ、殊に後者のごときは、大國主命の婿になつてしまつた。それで第三の使者としてタケミカヅチの神がつかはされた。國讓りといふ主權移動の政治上最も重大なる場合において、第一及び第二使者がその反對側に歸順するといふことは、民族的觀念の薄弱を證するものであるが、第三のタケミカヅチの神の場合においても、天孫民族と出雲民族との間に何等民族的反感若くは嫌厭の情があらはれてゐない。たゞ大國主命の子タケミナカタの神が異議を唱へて、タケミカヅチの神に反抗したがために、後者に壓服されただけであつて、大國主命自身は、『命令通り葦原中國を獻上しませう』と、始めから從順なる態度に出で、終に身を退いてしまつた。

この物語においてタケミカヅチとタケミナカタとの鬪爭はあるけれども、これは單に彼等二神間にかぎられるものであつて、天孫民族と出雲民族との全民族的鬪爭ではない。國家建設の直接動因は戰爭と移住とにあるのであるが、その國家建設にむかへる古代民族、しかもたとひ同一人種であつたとしても、

すでに政治上主權を異にせる兩民族が、かかる簡單なる口頭手段によつて、主權の讓與と兩民族の統一とを實行し得られるものであらうか(7)？　當然民族的觀念が强烈に作用せねばならぬ物語において、その觀念の稀薄なるは何故であらう？

つぎに神武天皇の東征物語をみやう。古事記によると東征の動機は、『どこにゐたなら、天下の政治をうまく治めることができやうか？もつと東の方に行つてみやう』といふ甚だ漠然たるものである。が書紀によれば、『天孫降臨以來、德を以つて治むること、ここに多年である。しかるに遠方の地はまだ王化に浴しない。シホツチノヲヂの言ふには、東方には美しい土地があつて、天下の統治には最も適したるところ、多分國の中心地であらう。そして彼地にすでに行つてゐるものがあると。多分その者はニギハヤヒであらう。彼地に行つて都をつくらう』といふので、古事記より東征の動機は稍明瞭であるけれども、それだけ虛構らしく思へる。かくの如く動機そのものにはつよい民族的觀念があらはれてゐないけれども、東征そのものは事實において異民族征服であり、民族移動である。それ故大和に入るに及んでは、異民族とみなすべき多くの部族が天皇のゆくへを妨害した。もちろん歸服せざるものはすべてこれを武力によつて征服したのであるが、その戰鬪行爲においても强い民族的觀念の如きはあまりみられない。たゞ最初のナガスネヒコ征討の際、天皇の兄イツセノミコトが負傷された。そして『自分は日神の子であるから、日に向つて戰ふことはよくない。それで自分は賤しいもののために痛手をうけたのである。今から行きめぐつて、日を背後にして攻擊せよ』と言はれた。この言葉には、たしかに民族的意識がこもつてゐる。古代信仰において太陽崇拜の存否如何にかゝはらず、自己を神裔と意識して他

民族に比してその優秀なる地位を宣揚し、ことに珍しくも敵軍に對して賤しい奴といふ侮蔑の言辭すら洩してゐる。實にこの神裔といふ意識こそ古代日本人の宗教的信仰であり、同時にその民族的觀念であつた。

けれどもかゝる民族的觀念の發露は、東征物語において單にこの場合のみであつて、其他においては賊軍を『荒ぶる神』、もしくはたゞ『國つ神』とさへ言つてゐる。そして數多き天皇の軍歌のごときは、單に戰鬪の歌としては非常に傑出してゐるのもあり、そしてその中には敵の行動を冷笑する感情をうたへるのはあるけれども、敵に對するつよい反感や、異民族に對する嫌忌憎惡の感情のごときは、全くその姿をみることができない。

註(1) 金澤庄三郎氏著、言語に映じたる原人思想七七頁。
(2) 出埃及記第五章第二二節。
(3) レビ記第二〇章第二六節。
(4) Tacitus, Germania XV.
(5) 同上 XXI.
(6) 言語に映じたる原人思想七八頁。
(7) 松本芳夫著、神代史研究一五七頁。

三

上述のごとく古代日本人の民族的觀念の發露の稀薄は、單に神話においてのみならず、その後の一般

に歴史時代とみなされてゐる時代においても同一である。例へば崇神朝前後の民族勢力擴張につれての異民族征伐物語においても、ひとしくさうである。

崇神朝における四道將軍の派遣、及び豐城入彦の東征も、たゞ『荒ぶるものをたいらげ、まつろはぬものを討つ』といふにとどまり、その結果は、『天下たいらぎ、人民富み榮へた』といふのである。それは單に皇威擴張の結果のみであつて、その征討において異民族に對する考へのごときはすこしもない。垂仁朝におけるタヂマモリの常世國物語においても、異國に關する知識は全く示されてゐない。この物語における常世國は、明かに現實的國土を意味するらしく思へるけれども、本來の常世國は、高天原が天上界表象であり、黃泉國が地下界表象であるとひとしく、古代日本人の他界觀念の一である地上他界表象である(1)。しかるにこの他界觀念が原始的意義を喪失して現實的國土を意味するらしく用ひられ、黃泉國が『根の國』となつて朝鮮を意味し、常世國が南支那若くは南洋を意味するものと、多くの人々によつて解されるのであるが、もしこの解釋を許すとして、タヂマモリの常世國を南支那、もしくは南洋の地とするならば、如何に古代日本人が地理的知識に缺け、民族的觀念の稀薄であつたかに驚くであらう。そこには、それらの地方の特色や、またそれらの地方において生活せる異民族とその異文化とについての知識は全くないのである。

景行朝の熊襲征伐においては、古事記に『兩の方に熊襲建二人有り。是まつろはぬ禮なき人等なり。……』とあるのみで、書紀においてもこれ以上熊襲についての知識を示してゐない。しかるに蝦夷については書紀に稍詳しく民族的特質をあげてゐる。景行朝二十七年武内宿禰の奏上に、『東夷の中に日高

見國あり。其の國人男女並びに結を擧げ、身を文げて、人となり勇み悍し。是をすべて蝦夷といふ。また土地こえて曠し、うちて取りつべきなり』とあり、また天皇が日本武尊をして東征に向はしむる際、尊にむかつて曰く、『東夷は識性暴びこはくして、凌ぎ犯すことを宗とす。村に長なく、邑に首なし。各々封界を貪りて、並に相かすむ。また山に邪き神あり。郊に姦き鬼あり。衢に遮ぎり、徑に塞がりて、多に人を苦ましむ。其の東夷の中、蝦夷これ尤も強し。男女交りゐて、父子別なく、冬は則ち穴に宿、夏は則ち樔に住む。毛を衣き血を飲みて、昆弟相疑ひ、山に登ること飛禽の如く、草を行ること走獸の如し。恩をうけては則ち忘れ、怨をみては必ず報ゆ。是を以て箭を頭髻に藏め、刀を衣の中に佩けり。或は黨頭をつどへて邊界を犯し、或は農桑どきを伺ひて人民をかすむ。うてば草にかくれ、追へば山に入る。故れ往古より以來、未だ王化にしたがはず。……』と。ところが常陸土記には

古老曰。昔在二國巢。山之佐伯。野之佐伯。普置二掘土窟一。常居レ穴。有レ人來則入レ窟。而竄レ。其人去。更出レ郊以遊之。狼性梟情。鼠窺掠盜。無レ被二招慰一。彌阻二風俗一也。……

とあつて、景行記における蝦夷の記事内容と極めて類似してゐる。實に以上の記事は、古書を通じて、古代日本人の異民族に關する知識を詳細に語るたゞ二つのものであつて、この以外には全くない。同じ景行朝において、ひとしく征伐されたる熊襲に關しての民族的知識は、上述のごとく甚だ貧弱であり、其他肥前風土記や豐後風土記には土蜘蛛について屢々のべてゐるけれども、多くはたゞその首長の名稱と征伐されたることをしるすにすぎず、その中最も詳細にしるすものは、豐後風土記の速見郡の中に土蜘蛛あつて、『……是五人並爲レ人强暴。衆類亦多在。悉皆談云。不レ從二皇命一。若强喚者。興レ兵距

焉』といふ記事のみである。ただし土蜘蛛については神武紀に『高尾張邑に土蜘蛛あり、其の人と爲り身は短かくして手足は長く、侏儒と相似たり』といふ記事があつて、これによればツチグモの語源がその民族の身體の形狀の類似よりきてゐるやうに思はれるが、もしクモを動物の名稱とすれば、民族的侮蔑の言辭ともみなし得られやう。

註(1)　神代史研究一一二頁。

四

古代日本人が、同じ國土において接觸したる異民族に關する知識が、上述のごとくすこぶる貧弱であるが、海外におけるものに對してもまたさうである。日本と朝鮮との關係は、古書の示すところではすこぶる遠い神話時代からである。即ちスサノヲが渡つて行つた『根の國』は普通に朝鮮であると解せられ、書紀の一書のごときは、『…　是の時に素戔嗚尊、その子五十猛神をひきゐて、新羅國に降りまして、曾尸茂梨の處にまします。……』とある、そのイタケル神は樹種をもつて朝鮮から渡來したと傳へられ、また他の一書には『韓鄕の島には、金銀あり。……』ともあつて、日鮮關係のきはめて古きことを示すのであるが、しかしその關係は甚だ曖昧である。

所謂歷史時代においては書紀の崇神朝六十五年に至つて、任那の國がソナカシチを遣はして朝貢してきたことをのべ、『任那は筑紫國を去ること二千餘里、北の方海を阻てて鷄林の西南に在り』と、その位置をのべてゐる。其後任那に日本府が置かれ、或はまた新羅王子天日槍が歸化したるなどゝ崇神垂仁

兩朝時代より日鮮關係が幾分密接になり、終には神功皇后の三韓征伐となるのである。けれどもその三韓征伐の動機は、古事記には單に『西の方に國あり。金銀をはじめて日のかがやく種々の珍寶、その國にさはなるを、あれ今その國をよせたまはむ』との神意によるのみであるが、書紀によれば、『熊襲の國よりも遙かにまさりて金銀財寶に富む新羅がある。この國を征服すれば熊襲も自然に服從するであらう』との神意にもとづくのであつて、熊襲征伐と關聯してそこに幾分の民族的觀念がみられるのであるが、しかし全體の物語はおびたゞしく神話的性質におほはれて居り、ことに仲哀天皇が神意を疑つて朝鮮國土の存在を否定したごときは、全く民族的觀念の缺無をかたるもので、異國征伐物語としては甚だ奇怪である。

其他の朝鮮問題についての記事も、彼我の地位は甚だ漠然であり、異國民としての觀念もとぼしく、從つて民族的嫌惡、反感のごときは殆んどみるを得ない。たゞ欽明朝二十三年任那滅亡に際して、朝鮮の無禮を憤慨せる記事あるのみである。しかるに同じ欽明天皇紀五年十二月の條に次のごとき記事がある。『……佐渡の島の御名部の碕岸に、肅愼の人有りて、一の船舶にのりてとどまる。春夏捕魚して食に充つ。彼の島の人は、人に非ずと言ひ、又鬼魅なりと言ひて敢て近づかず。……』肅愼（靺鞨）は朝鮮の北方にあつた國で、從來日本との關係が至つて少かつたらうから、彼等に對して異民族觀念を强めるのはもつともであるけれども、彼等を人に非ず鬼なりと言つて恐怖するほどの民族的意識をもちながら、一方朝鮮人に對して異民族觀念を强めなかつたのは何故であらうか？

五

國家建設の直接動因が戰爭と移住――即ち異民族の征服と領土の略取――とにあることは上述したが、日本歷史においてこの條件に最もよく適合するのは、神武天皇の東征物語である。けれどもこの時代はなほ傳說時代であつて、勿論この東征をもつて、嚴密に日本國家の建設時期となすことはできぬであらう。が一定の土地において治者と被治者とが存在し、そこに政治生活を營む社會を以て國家とみなし得るならば、おそらく第三四世紀頃までの日本は、かかる國家に分立してゐたものであらう(1)。それがその中の最も强勢なる國家に漸次征服されて、統一ある日本國家を形成するに至つたのである。而してそれが內においてますます統一するとともに、外において異國とその文化とに接觸し、はじめて國家的自覺、乃至國民的覺醒を喚起したのである。

かかる國民的覺醒が始めてつよく史上にあらはれたのは應神朝である。書紀によれば帝の二十八年高麗王の朝貢の表文中に、『高麗王、日本國に敎ふ』とあつたので、太子ウヂノワキイラツコがその無禮を大いに怒り、高麗の使節を責めて、その表文を破りすてたといふのである。がしかし當時の日本は文化の點において到底朝鮮の比ではなく、その恩惠に浴せざるを得なかつた。支那の儒敎や、印度の佛敎も主として朝鮮を經て傳へられたものである。かかる外來思想の輸入につれて、一方國粹的保守思想が貴族階級の中に勃興し、その保守主義者が自己の地位を確保するための動機から、新文明謳歌論者との間にはげしい鬪爭を惹起した。即ち佛敎傳來に際しての蘇我氏對物部及び中臣諸氏の抗爭である。佛敎

信仰派の蘇我氏が、『西蕃の諸國がすべて之を信仰するのに、日本ひとりこれに背くことができやうか』といふ大勢順應論を根據とせるに反し、反對派は、『わが國は古から祖宗の神を祭つてゐるのに、いま改めて蕃神を信仰したなら、恐らく祖宗の神の怒をうけるであらう』といふ特殊文化論を以つてしたけれども、國家的自覺の點においては、兩派いづれもいまだ不徹底である。

しかるに蘇我氏とともに佛教信徒であつた聖德太子は、新文明をもつて國家的自覺を促したる第一人者であつた。即ち內においては國家を統一して、大氏の勢力に壓倒されて根底より動搖しつつあつた皇室の安定を確立し、外に於いては唐帝に與へたる國書において、『東天皇敬みて西皇帝に白す……』或は『日出づる處の天子、書を日の沒する處の天子に致す……』の示すごとく、國家の獨立と見識とを保つたのである。かくて太子によつて始めて日本が新國家政策を確立するに至つた。

註(1) 後漢書東夷列傳には『通二於漢一者三十許國。國皆稱レ王。世々傳統。其大倭王居二邪馬臺國一。』とある。

六

古代日本人の民族的觀念、もしくは國家統一後の國民的覺醒が、すくなくとも古書の示すかぎりにおいて甚だ微弱であつたことは、上述の解明によつて明かであらう。けれどもこれは古書の示すそのまゝに事實であつたらうか？

まづ國際關係において國民的覺醒のおくれたのは、もちろんわが國の國家的統一のおくれたのによるが、またわが國が東亞大陸より隔絕したる島國であつて、大陸諸國との國交——もちろん地方的、もし

くは私的交通の古くから頻繁に行はれたのは事實である――が、甚だ困難で容易に行はれず、更にまたわが國の文化が大陸諸國のそれに比して甚だ劣り、長くその輸入を必要としたことに基因するのである。けれども言語風習乃至宗教を異にし、生活範圍と狀態とを異にせる朝鮮のごときに對して――もちろん言語風習等において兩者に幾分の類似點があつたらうけれども、全く同一ではなかつた――民族的觀念を強めなかつたのは、一方肅愼人を人に非ず鬼とみなしたる事實と照應して、甚だ奇怪と言はねばならぬ。思ふに朝鮮人との接觸がすでに遙か遠い時代からであつて、從つて兩民族間に一種の親密感が生じてゐたためもあらうが、他の理由は、古書における朝鮮其他の外國に關する記事は、多く外國の記錄にその典據を求めたること(1)、並びに假令わが國の記錄が參照されたとしても、その記錄――ことに初期の――は多く歸化人によつて作成されたものであらうことによつて、民族的觀念のごときはおのづから薄弱ならしめられたのであらう。

更にわが國土内における異民族に對する觀念の薄弱なるは何故であらう？景行紀及び常陸風土記におけるごとく、蝦夷に對する異民族觀の甚だ強きにかかはらず、熊襲其他に對して微弱であるのは、また奇怪と言はねばならぬ。現在考古學、人類學の敎ふるところによれば、第一、二世紀頃の日本國土における民族は、人種上殆んど同じものであつて、所謂『汎アイヌ』と稱せらるるアイヌ的要素のつよき人種であつたらうとのことである(2)。それ故彼等の間に、人種的相違より生ずる區別感は微弱であつたにちがひない。けれども彼等は相互に政治的主權を異にし、地方的に割據して特殊の生活狀態を構成し、特殊文化を創造發展せしめたであらうから、民族的接觸のあつた場合、異民族觀念が當然強烈に作用し

たにちがひない。景行紀及び常陸風土記における蝦夷觀は、かかる事情の下にできたものである。しかるに熊襲及び土蜘蛛においては、彼等が主として西南地方に住する民族であつて、これらの地方は所謂天孫民族とは古くより關係密接であり、從つて兩者間の接觸も多く、文化程度もあまり差異なく、たゞ政治的主權を異にしたるのみであつたらうから、自然民族的觀念を弱めたのであらう。

が猶その他に、彼等の民族的觀念をして微弱ならしめたる一般的理由が存在する。即ち古代日本人は、地的環境の上から異民族との接觸が比較的すくなく、且つ微温的風土の影響によつて平和なる生活を送り得たが故に、換言すれば安穩なる社會とのどかな自然との恩惠につつまれて、あくまで平靜素朴な心情を養ひえたがために、激烈なる對照乃至鬪爭から生ずる自他の區別感が生じなかつた。從つて彼等には自我と非我との對立が薄弱であつた。明確なる自我意識のないところに、つよい民族的觀念の起り得やう筈がない。個人としても、神話並びに歴史上の英雄において強烈な自我意識の所有者のすくないことは、日本歴史をして非常にさびしからしむるのであるが、同時にそれは日本人の平和的民族であることを語るのである。

最後に、古書において民族的觀念の表現を微弱ならしめた重大なる理由がある。それはわが國家の統一を強固にし、皇室の基礎安定を劃するためにとりたる古書作成の際における政策である。わが國の神話が政治的性質をあまりに多く有してをり、ことに國讓り物語のごときはその最も大なるものである。上述のごとく國讓り物語はそのまゝ史實とみることが到底できぬのであつて、假令この物語に史的背景があるとしても、物語そのものは多くの變改を加へられたものである。なんとなれば政治的主權が口頭

段によつて讓與されるごときは、全くあり得べからざることであるからである。しかもかかるあり得べからざることが物語に附加されたのは、天孫民族の優越的地位と皇室の絶對的至上權とを承認させるための手段であつて、天孫民族と出雲民族とが政治的に結合するとともに、その信仰も結合され、兩民族の祖先が同一系統の本支の關係になされたのである。かくのごとき目的は、單に出雲民族に對してのみならず、他の民族に對しても必要であつた。それは各地方の國つ神が、天神の子孫と何等かの血族關係において結合されたる事實によつて知ることができる(3)。かかる目的をもつて古書を編纂する以上、民族的觀念の表現が弱められるのは當然のことと言はねばならぬ。

要するに古代日本人は、人種上、もしくは地理的位置、風土、及び文化程度より、幾分民族的觀念を弱めたであらうし、また假令强烈なる民族的觀念を有したとするも、政治的必要上人爲的にその表現をにぶらしめられ、たゞ地方的人民のつよき實感にたてる材料のみがそのまゝ採用され、それのみがつよき異民族觀を示してゐる。

註 (1) 書紀の體裁をみよ。

(2) 松本彦七郎氏、『日本先史人類論』(歴史と地理第三卷第二號)。濱田耕作氏、『考古學上より見たる九州の古代民族』(史學雜誌第三十二編第四號)。

(3) 神代史研究一五七―一五九頁。

松本芳夫